

平成 30 年 6 月 15 日現在

機関番号：37111

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26370754

研究課題名(和文) 日本人大学生の明示的・暗示的英語知識の測定：わからないのか使えないのか

研究課題名(英文) Explicit and Implicit English Grammar Knowledge of Japanese University Students

研究代表者

徳永 美紀 (Tokunaga, Miki)

福岡大学・共通教育研究センター・講師

研究者番号：30461479

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は大学生の英文法の知識と産出能力の測定を行った。結果、冠詞、間接疑問文、関係代名詞などの項目は正しい知識に欠けることが判明し、明示的な指導および学習の重要性が確認された。さらに複数のS、進行形、完了形などは、形式の理解度と、どういった場合に使用すべきかの理解度に差のあることが判明し、多読、多聴などを通してより多くの例に触れる事の必要性が伺えた。スピーキングにおいては、速度が非常に遅く考えてからしか話せないという結果であった。自由会話など、その場で考えて発話する事で流暢さの向上をはかりつつ、プレゼンテーションなどの場合は正確さも求める等、バランスのとれた指導と練習が望まれる。

研究成果の概要(英文)：This research tried to measure Japanese university students' knowledge and production accuracy of some basic English grammar structures. The results showed that articles, embedded questions, and relative clauses were not understood by many of the participants, and may require explicit instruction and practice. Plural -s, progressive sentences and perfect sentences showed that, even their forms seemed to be understood, when to use them was not. For those structures, more input through extensive reading and listening may be necessary. In speaking production, it became clear that participants of this study spoke extremely slowly, suggesting that they had to compose sentences in their mind before speaking. Practicing spontaneous speech to develop fluency is required, as well as giving appropriate feedback in prepared speech to develop accuracy.

研究分野：英語教育

キーワード：大学生の英語力 英文法 文法性判断テスト 理解と産出 学習と練習

1. 研究開始当初の背景

第二言語習得においては、目標言語に関する意識的で説明可能な明示的知識と、直観的で手続き的な暗示的知識が存在するとされている。しかし、日本のように授業以外で英語が必要となる場面が極めて少ない環境で外国語として英語を学ぶ場合、自然と暗示的知識として習得される場合よりも、学習することによる明示的知識から暗示的知識に発展する機会が多いであろう。暗示的知識の習得には多くの練習を必要とするが、一般的な日本人英語学習者のおかれている環境では、練習量を確保することが難しい。だからといって、教室内での活動をコミュニケーション活動などに置き換え、明示的指導を減らすことが必ずしも解決策とはいえない。実際、近年の大学入学時の学生の英語力は低下しており、コミュニケーション重視学習指導要領が実施されて以降、高校生、大学生の英語力が低下しているとの報告もある(石原、他 2010、齊田 2003、志手 2007)。暗示的知識を習得するのが困難な環境だからこそ、明示的知識の定着の必要性が高いといえるのではないだろうか。

研究代表者は、英語初級者を対象に、講義や教科書で使われる文法用語などのメタ言語の認識度を調査してきたが、基本的な文法用語を認識できない大学生が多いことが判明した(Tokunaga, 2014)。さらに、メタ言語の認識度と英語習熟度テストのスコアとの相関関係が認められたことで、メタ言語知識を含む明示的知識が重要性であると考えている。

2. 研究の目的

本研究の目的は、日本人大学生の英文法に関する知識と産出能力を測定することである。特定の文法項目における明示的指導の効果に関する研究はこれまでも行われてきたが、本研究はあくまでも現時点での知識と産出能力を探索しようとするものである。その結果から、明示的指導を必要とする文法項目、暗示的指導(練習活動)が必要な項目を判別することで、正確さと流暢さのバランスのとれた英語習得に向けた指導に繋げることを目標としている。

その結果を公開することで、コミュニケーションを目的とする実践的な練習、および基礎知識の定着を目標とする指導が、偏らず、必要な部分で的確に行われることに繋ぐことを意図している。

3. 研究の方法

初年度は文法性判断テストと短文英訳テストのパイロットテストを行った。20の文法項目に関する時間制限有りとは時間制限無しとの文法性判断テストを作成し、260名を対象に実施した。問題プールとして各文法項目に対して非文法的な文を2種類、11項目に対して文法的な文を2種類の合計68問を準備し、

共通項目を含む37問のテストを4バージョン作成した。時間制限有りとは時間制限無しとのテストは異なるバージョンを受験するように設定し、期間を2週間以上空けて実施した。対象者は時間制限有りとは無しとのそれぞれ1バージョンを受験し、共通項目を使用して4バージョンのデータを等価し、Winstepsを使用して分析を行った。

結果、時間制限の有無による有意差は認められなかった(Tokunaga, 2016)が、文法的文と非文法的文の結果に有意差が確認された。さらに、対象文法項目の中に難易度の低すぎる項目と高すぎる項目があったことや、問題文やその訳が混乱を起こしたと考えられる問題が確認され、文法項目を絞り、いくつかの問題文を変更した。

初年度後半は、変更を加えた時間制限無しとの文法性判断テストと短文英訳テストを約200名の学生を対象に実施した。結果、対象文法項目以外の間違いをどう扱うべきかという問題が生じた。

これらの結果を踏まえ、27年度は文法性判断テストは時間制限無しバージョンのみ実施することとし、短文英訳テストにおいては、対象文法項目の重複する問題文はそれぞれの項目に対して採点できるような配点形式に変更した。約500名の大学生に対してアンケート、文法ルールテスト、時間制限無しの文法性判断テスト、日英短文翻訳テスト(筆記)を実施し、データの使用に同意した449名のデータを分析した。日英短文翻訳テスト(口頭)と絵描写テスト(口頭)を授業時間外での協力者22名を対象に実施した。

28年度は27年度のテストにさらに修正を加え、文法ルールテスト、文法性判断テストおよび筆記の短文日英翻訳テストを345名の参加者を対象に実施した。更に45名の参加者に対して口頭の短文日英翻訳テスト、口頭及び筆記の絵描写テスト(図1)を実施した。

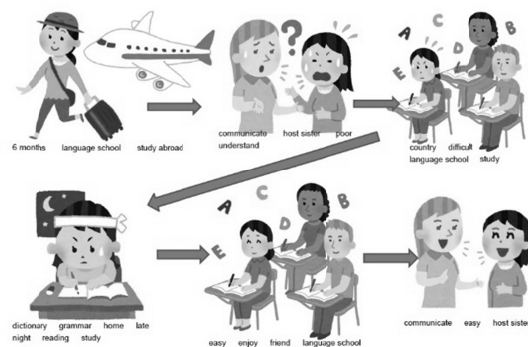


図1：絵描写テストで使用した絵(必要と考えられる英単語付き)

4. 研究成果

27年度の対象者約500名に対して行ったアンケートでは、授業以外での英語の使用に関して137名が「ほとんど使わない」、260名が「全く使わない」と解答し、一般的な日本人

学生にとって、英語はまだ教科であり、コミュニケーションの道具として使用している、又はそのような機会のある学生は稀であることがわかった。

文法ルールテストで最も難易度の高かったのは複数の *S* (総称の *S*) で、次に *Go+動名詞* (*go skiing*)、関係節、間接疑問文、冠詞と続き、難易度の低かったのは規則動詞の過去形、3単現の *S*、比較級の *than* などであった。名詞の前に数が示されている問題の複数の *S* は難易度が低かった為、名詞が複数であるとき語尾に *S* を付けるという形式は理解できている学習者が多い反面、“Do you like dogs?” のように明らかに複数であるという表現の無い場合など、「どのような場合に複数形を使うのか」という事が理解できていない学習者多い事が伺えた。文法性判断テストでも、関係節、間接疑問文、*Go+動名詞*、複数の *S*、冠詞などが難しく、規則動詞の過去、3単現の *S*、Yes/No 疑問文などが比較的容易であるという結果であった。特に、主格の関係代名詞や冠詞は抜けていても気づかず、訂正できないというケースが多かった。

産出を測定するテストでは、短文日英翻訳テスト(筆記)において、知識の測定の結果と同様に間接疑問文や冠詞、付加疑問文や関係節が難しいとの結果になった。しかし、否定文や現在進行形の難易度が高いという予想外の点があり、これは口頭の短文日英翻訳でも同じ結果であった。教科書などでよく目にする進行形の例文に使われる動詞(*study*、*read* など)以外の場合、複数の *S* と同様、こういった場合に進行形にすべきかが習得できていないことが伺える。

口頭及び筆記の絵描写テストでは、まず全体を通した時制の一致ができていない対象者が多くあった。他のテストで難易度の高かった複数の *S* と冠詞の間違いも目立ち、複数形にもされず、冠詞もない名詞が単独で使用されるケース(*friend*、*class* など)が正しい使用よりも多いという結果であった。その他のテストでの文法項目に含めていなかったが、絵描写テストでは現在完了形の誤った使用(完了形にすべきではない部分での使用)が目立ち、上記の複数の *S* や進行形と同様に、形は理解できていてもこういった場面で使用するかを理解していないケースであると考えられる。

	口頭 (繰り返し含む)	口頭 (繰り返しなし)	筆記
最小	33	33	39
最大	152	147	149
平均	74.3	70.0	69.0

表1 絵描写テストの単語数

	最大	平均	最小
語数/分	82.9	34.9	10.2
音節数/分	122.4	53.1	18.0

表2 口頭絵描写テストの発話速度

絵描写テストは口頭テストの後に筆記を行ったが、口頭における1分間の発話数が顕著に少なく、口頭と筆記における産出量や文の正確さに大差が見られなかった(表1および表2)。英語の場合、一般的に1分間に120語以下は「遅い」とされるが、対象者は最大でも約83語、平均は約35語というスピードであった。これらの結果から、本研究の対象者が口頭での発話の際もゆっくりと考えてから明示的知識に頼って発話していることが伺える。

これらの結果から、まず冠詞、間接疑問文、関係代名詞など、どのテストでも難易度の高かった文法項目は正しい知識に欠けると考えられ、明示的な指導および学習が必要であると言える。特に冠詞など基本的な説明だけでは足りない項目は、沢山の例を用い、繰り返し練習することが求められる。次に、複数の *S*、進行形、完了形など形式の理解度と、こういった場合に使用するのかの理解度に差のある項目は、インプットの量を増やし、多くの例に触れる必要がある。教科書の例文に頻出する単語以外では使えない項目も見受けられた為、多読や多聴による偏りのない種類のインプットが求められる。

発話のスピードが非常に遅く、じっくり考えてからしか話せていないという結果からは、アウトプットの量や種類を増やすことの重要性が考えられる。授業内でのスピーキングの練習は、教科書の会話を読む、会話例を少し変えて練習する、プレゼンテーションをするなど、完成された英文を使用したり、準備をしてから発話する事が多いのが現状であるが、流暢さを伸ばすにはその場で考えて発話するという練習も必要である。一方で、流暢さのみを重視し、正確さを無視することも問題である。理解に大きな支障のない文法の間違いは訂正されないと気づかない為、いくら練習を重ねても正確さが伸びない可能性があるからである。実際のコミュニケーションで英語を使う場合と、授業での練習の差は適切なフィードバックの有無である。自由会話など流暢さを練習する場を持ちつつ、プレゼンテーションなど準備をしている場合は正確さも求める等、バランスのとれた指導及び練習が重要である。

<引用文献>

石原堅司・西納春雄・時岡ゆかり・吉村俊子、大学生の英語力調査：1994年度と2008年度を比較して、言語文化、13(1)、2010、55-67

齊田智里、高校入学時の英語能力値の年次推移、STEPBULLETIN、2003、15、12-22

志手知行、学力再考：学生の英語力の現状と関連させての一考察、国際経営論集、32、2007、109-118

Tokunaga Miki, Exploring Metalinguistic Knowledge of Low to Intermediate Proficiency EFL Students in Japan, SAGE

OPEN, 2014, October-December, 1-10
Tokunaga Miki, Effect of time pressure on grammaticality judgment tests with L1 translation, Annual Review of English Learning and Teaching, 21, 2016, 1-12

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 3 件)

林幸代, 文法性判断テストにおける関係節項目の難易度とそれに関わる要因, 外国語教育メディア学会(LET)九州・沖縄支部紀要, 査読有, 18, 2018, 31-44

Miki Tokunaga, Exploring English grammar knowledge and written production of Japanese EFL learners, 東アジア英語教育研究会緩急論集, 査読有, 6, 2017, 51-69.

Miki Tokunaga, Effect of time pressure on grammaticality judgment test with L1 translation, Annual Review of English Learning and Teaching, 査読有, 21, 2016, 1-12.

〔学会発表〕(計 8 件)

Miki Tokunaga, Grammatical knowledge and production accuracy of Japanese EFL learners, The Applied Linguistics Conference, 2017.

林幸代, 主格関係節の認知に関する考察 - 文法性判断テストの結果から -, 第36回福岡認知言語学会, 2017.

徳永美紀, 林幸代, 日本人大学生の口頭産出の正確さ: 文法性判断テスト及び筆記テストとの比較, 第173回東アジア英語教育研究会, 2017.

Miki Tokunaga, Comparing grammar knowledge and production of Japanese EFL learners, ALTAANZ 2016, 2016.

Miki Tokunaga, Effect of time pressure on grammaticality judgment tests with L1 translation, ALTAANZ 2016, 2016.

徳永美紀, 林幸代, 日本人大学生の英文法知識と産出能力, 第160回東アジア英語教育研究会, 2016.

Miki Tokunaga, Japanese EFL learners' implicit and explicit knowledge: What they know and what they can do, Language, Education, and Diversity Conference 2015, 2015.

徳永美紀, 林幸代, 日本語訳付文法性判

断テストによる大学生の英文法知識の検証, 日本語テスト学会第18回全国研究大会, 2014.

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

取得状況(計 0 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
取得年月日:
国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等
<http://tokunagamiki.weebly.com/3074031330.html>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

徳永 美紀 (TOKUNAGA, Miki)
福岡大学・共通教育研究センター・講師
研究者番号: 30461479

(2) 研究分担者

林 幸代 (HAYASHI, Sachiyo)
福岡大学・共通教育研究センター・講師
研究者番号: 00609464

(3) 連携研究者

()

研究者番号:

(4) 研究協力者

()